
首輪付きが学園入り

D.L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首輪付きが学園入り

【Nコード】

N4031Y

【作者名】

D・L

【あらすじ】

ビッグ・ボックスでORCA旅団のメルツェル&ヴァオーの2人と戦い

相打ちになり、死んだらトリップというわけのわからないものですが、

よろしく願います。

注意！初心者なのでほんとに駄文に思いますが、温かい目で見てもらうとうれしいです。

注意書き

初めましてD・Lといたします。

初投稿ですので、ものすごい駄文になると思います。むしろならないといろいろおかしいです。

あと初心者でもあるので、書き方なども教えてくれるとうれしいです。

自己満足のために書いたのでつまらないと思います。

読む方は1度深く考えた後に「ハラショー！」と叫び倒した後に

もう一度深く考えてから読んでください。

それでも、読んでくださったなら本当にありがたいです。すごいうれしいです。

拝んで崇拜したくなります。

注意書き（後書き）

これからもよろしく願います。

D・L

第1話（前書き）

どうも D・Lです。

おもしろくないと思いますが、よろしくお願いします。

第1話

作戦領域ビッグ・ボックス

メ「ORCA旅団メルツエルだ。」

メ「ビッグ・ボックスへようこそ。 歓迎しよう盛大にな！」

ウ「レイテルパラッシュ ウィン・D・ファンションだ

一気に敵ネクストを叩く 遅れるなよ。」

首「了解」

ウィン・Dがガチタンと戦っていると

ウ「…火力だけか それでORCAとは、笑わさ」 ヴァ「ハッハア

」ウ「…すまない…撤退する」

(…………え…………なにそれ…………)

ヴァ「ハッハー！」

まだまだいけるぜ、メルツエエエエエル!!」

ガチ「…スピーカーが両背中と左腕のガトリングで、苛めてくる。

メルツエル?はライフルと大型ミサイルを使い分けて、苛めてくる。

(ちょ! 待つ!)

AP70%減少

メ「用済みとなって、尚尽くすか。」

(……………イラッ)

メ「憐れな駒だ。」

(……………イラッイラッ)

メ「すべて終わっているのだよ……。」

プツン

首「クロス」

右腕のMR R102（アサルトライフル）と左腕の—03 M_マO
シンガン
TORCOBRAで
スピーカーに八つ当たりをして、

ヴァ「へっ、ここまでか… 悔いはねえ… 楽しかったぜ…メルツ
エル……!!」

ボコす

メ「…単純馬鹿が、死んで治るものでもあるまい……」

メルツエルは両手のライフルを使い、
スラッグガン
首輪付きは左背中アサルトライフルのKAMALと右腕のMR-R102を使って戦
い、

メ「（ブツ、グブツ）…潮時か　まあいい　最早私も無用だ　人類
に黄金の時代を。」

首「あゝ俺ももう無理死ぬわ…」

（…すいません…セレンさん…）

第2話（前書き）

100%駄文です。

戦闘とかマジ無理です。

ごめんなさい

第2話

職員室

「千冬side」

はぁ…………

「なぜ…一夏がISに反応している。」

これからめんどくさくなるな。

「山田先生、政府の対応は？」

「世界初の男性IS操縦者で日本人なのでIS学園へ入学させるらしいです。」

「やはりそうならーズドオオオオオオオン　なんだ次から次に」

「アリーナに上空から何か落ちてきたそうです。」

「はぁ　行くぞ山田先生。」

「わ、私もですか!」

「当たり前だ、行くぞ。」

「はいっ」

アリーナ内

「なんでしょうか？」

あれは………

「人だ、怪我をしている保健室に運ぼう。 近くに何かあったらそれも回収だ。」

「尋問は、後だ。 . . ん、なんだ？」

千冬が男のそばにあるドッグタグを見つけ、

「ISだと！ なぜこいつが持っている。」

ISを見つけ回収する。

ふたりは、男を保健室に連れて行き、そのあと一人でそのISを調

べた。

IS 学園保健室

- 首輪付き side -

(知らない天井だ。)

(ここはどこだ、地獄じゃないのか、天国なのか。

ハッまさかアスピナの施設！ いや違うな俺、メルツエル？と相打ちにあつて死んだし、

んじゃあここはどこだ？)

ガラッ

威圧感がやばい女性と、メガネのサイズが合っていないような女性が入ってくる。

「起きたか、 悪いがこちらの質問に答えてもらつ。」

「わかった、 かわりにこちらの質問にも答えてもらつ。」

「わかった、 まず最初に聞くおまえは誰だ。 あとなぜISを持っていた。」

「リンクスだ。独立傭兵の、名前はない。周りからは首輪付きとかリンクスとか呼ばれてた。カレードランクNo.6 そこそそ有名だったはずだ。ISなんてものは、知らん。初耳だ。」

「知らんな。リンクスとはなんだ。カレードもだ。ISを知らんだと。」

威圧感が半端ない女性睨まれる。

「リンクスは、人型起動兵器アーマードコア・ネクストに乗ることができる人のことだ。」

カレードは、傭兵やリンクスを管理機構のことだ。まじで知らんの？（目が怖いよう……）

「ああ、そんなものまったく聞いたことがない。」

「まじかよ。なんなんだよこれ。イジメか？新手的イジメなのか？」

「知らん。とりあえずおまえらは傭兵か？」

「一応」

「あと何の目的であそこに来た。」

「俺は企業連の依頼で、ORCA旅団の本隊を撃破しにビッグ・ボックスに行つて、メルツェルかなんかと相打ちして死んだと思つて気絶したらここにいたんだよ。んでこちらからも聞きたいことがある。」

「まずここはどこだ。天国か地獄か、それともアスピナの実験施設か？」

「ORCAかなんかは知らんが、ここは天国などではない。日本のIS学園だ。」

「あれ？日本って極東の日本だよなあ？」

「ああ」

「国家って前の国家解体戦争で解体されてなかったっけ？」

「何言ってるんだ。」

「え？ あれ？ 間違ってたっけ？」

「現にここは、日本だ。」

「うーん まあいいや んでISってなんだ？後、IS学園も。」

「ISは正式名称インフィニットストラトス
宇宙での活動を想定されたマルチフォーム・スーツだ。」

「なにそれ？ 聞いたことない。」

「はあ…話が全く噛み合っていないな。」

「んじゃあこちらで起きたことを一通り話させてもらう。」

俺は、AC、ネクスト、ノーマル、MT、国家解体戦争、リンクス戦争、企業連、ORCAのことや

国家解体戦争で国家が崩壊し、かわりに企業が世界を統治していることと世界はコジマ粒子という

汚染物質で汚染されていて人類の過半は清浄な高度7000mの高空にあるクレイドルという居住用巨大航空機に移住していることなどを話した。

相手側は、そのことについて全く知らずむしろ戦争はどれも起きていなく、ACなどについては、開発すらされておらず、コジマ粒子も存在していないと言う。

そして相手側は、ISについて話し女性しか乗れなくて女尊男卑になっっているけど先日、

初の男性操縦者を発見したこと、ISについては、軍事利用などをアラスカ条約で禁止されていることを話した。

もちろん俺は、ISなんて知らないし、アラスカ条約なんて初耳だと話した。

「とりあえず、お前はここに監禁させてもらう。明日また来る。今日は、ゆっくり休め。」

そう言つて、二人の女性（片方確実に空気だった）は部屋を出て行った。

（おいおいおいおい、ほとんど初耳だぞ。なんだよISとか、女尊男卑？んなもんになった日な んてねえよ。）

（はぁ……………もうやだ。疲れた。死んだと思ったら、変なところ来てるし。）

（なんだよ、ここまさかの別世界とでもいうのか？……………そうかも……………）

（もう無理寝る。） z z z z z z z

- 千冬side -

「なんなんですか？あの人、言ってることが分かんなかったんですけど……」

「いや その前に厄介なことが二つある。」

「？ なんですか。」

「まずあいつには、IS適性がある、しかもA+だ。」

「ほ、ほんとですか！」

「あとあいつが倒れている近くにドッグタグがあつたんだがISだった。」

しかも解析がほとんどできなかった。

分かったのは、そのISが未確認のコアが搭載されてたくらいだ。

「

う、嘘でしょう！ 何ですか？」

「さすがに私でもわからん。」

「はあ何でこんなに問題が山積みになるんだ。一夏といい、あの男といい。」

「あの人がいたいどこの人なんでしょう。未確認のコアを搭載されてるISを持っていたり、変なこと言い出したり。」

「あくまで私の推測の一つなのだが、山田先生は、並行世界や別世界などを信じるか。」

「あの世界はたくさん分岐しているってやつですか。」

「ああ、で私はあいつがその並行世界から来ているとかんがえているのだが。」

「つまり、あの人が、並行世界から跳んで来たとしてもいいのですか。SF作品じゃあるまいし。」

「あくまで可能性の一つだ。私だってできるのならば、そんなことかんがえたくないが・・・

とりあえず今夜は、徹夜でいろいろ調べるぞ、山田先生。」

「ええ！ほんとですか！」

IS 学園保健室

- 首輪付き side -

「う うううう なんでア、アンサラ - に、ソルディオスが
っぱい.....」 z z z z z z z z z z

こんな感じ？（アンサラ ・ ソルディオスオービット付き）

> i 3 4 7 0 5 — 4 3 9 0 <

第2話（後書き）

駄文です。ほんとごめんなさい。
たぶん来週あたりから投稿がすごい遅くなります。すみません。

第3話（前書き）

第3話投稿させてもらいます。

いくつかのコメントありがとうございます。

うれしすぎて逆流しそうになりました、

でも抑えてハラショー！を連呼させてもらいました。

これからよろしく願います。

第3話

- 首輪付き side -

IS 学園保健室

ガラッ

昨日の二人の威圧感がすごい方が入ってきて、

「お前の処置が、決まった。」

「んで、どうなったんですか。」

「お前は、この学園に入ってもらつ。拒否は無理だからな。」

「まあ行くあてないからいいですけど。んで俺は何をすればいいんですか。」

「用務員ですか？それともなんかの管理とかですか？」

「いや、お前はこの学園の生徒として入ってもらつ。」

「へっ？　ほんとですか？　冗談ですよ？

この学園ってIS操縦者を育てるためですよ？」

「ああ」

「んじゃあ　乗れないじゃないですか？　俺、男ですよ。

昨日言ってた男性操縦者じゃないんですし。あとISについてなんも知らないですし。」

「それについては大丈夫だ。

調べさせてもらったが、お前には、ISの適性がある。しかもISも所持していた。」

「まじですかい。」

「そういうことからお前には、　ドスン　これを読んでもらう。」

「なんですか、この殺傷能力高めでもものすごい分厚い本。」

「お前にはこれを1週間で覚えてもらう。いいな」

「え？こんなに！無理だ！覚えきれねえ！」

「覚えろ」

「ハッ！了解いたしました。！」

「ここはありとあらゆる国家、企業、法律の干渉を受けない。もう有名無実化しているがな。」

まあ ここにいればある程度は、大丈夫だろう。」

女性はケースから、『ストレイド』と書かれている。ドッグタグを出した。

「これがISだ。」

「これ？ これって俺が持ってたやつじゃないですか。無かったと思っただけでこれですか！」

何でこれが、ISに！？ え？どうということ。ナニカサレタの俺。

「

「知らん お前が来た時に、近くに落ちていて拾ったらISだったんだ。」

「まあ　なんでかほとんど解析できなかったがな。」

「つていうかISってこんななんですか？」

「待機状態だからだ。専用機などは、アクセサリーなどになる。」

「んじゃあ俺はIS学園に通う訳だな。」

「んで俺は、どこで生活すればいい？あと俺の名前はどつする。」

「そうだな、ここは全寮制だ。一人部屋でも用意しておく。名前に
ついては、適当に考えとけ。」

「わかりました。」

「そついや、あんたと昨日のメガネの人の名前知らなかったな。」

「織斑千冬だ。お前の教師になる。もう一人は、山田麻耶だ。副担
任だ。」

「そついやあ　昨日少し考えたんだが、俺並行世界やらなんやらか
ら来たんかもしれん。
信じたくないが。」

「私達もそういう仮説も考えたんだが。」

「まっ、信じられるような話じゃないからな。」

「そうだな。」

「んじゃあ俺はこれを覚えますよ。」

「分かった、それではな。」

ガラッ

織斑千冬は出ていき保健室に一人になった。

「んああ よし！覚えるか！……………もう
無理だあ。」

「はあ んでこれってホントにISなんかなあ？」

ドッグタグ
ISを首にかけ

「何これ。前にいっぱい出てきた！」

いくつかのウィンドウが出てきて

「あぁっ！ 何でネクストの装備がいっぱい書いてある！？」

「どういうこと、まさかこれが俺のISなのか？」

機体の情報を見て、

「そっぴゃコジマやばくね……………って無害iiiiii！ あのコジマが無害だと！」

「やばっやばっ なにこれ夢？夢なら覚めてえー」

「しかもなんかカリードとORCAのメンバーの機体が全部あるし、操縦者の名前もあるし」

「あつ俺が切れてボコしたやつヴァオーって言うんだあ。エンブレムカブトムシかあ」（現実逃避中）

「ん？パッケージって何」

分厚い本を見て

「追加武装的なモンか。」

「おっ！俺のやついくつか最初からパッケージあるじゃん ってアームズフォートオオオオ！」

「やばいやばい、スピリット・オブ・マザーウィルとかあるし、アンサラ も！？」

「うわーなにこのキチガイ、バグってんじゃないね。」

「もういやだ、本読む。」

あきらめて本読みだした。

「あゝあゝ あ こっちも無理い、覚えれるかよこんなの。」

「名前どうしよ?。」

首輪付きは、分厚い本をときどき現実逃避しながら読んだ。

第3話（後書き）

今回も、読んでもらってありがとうございます。

来週あたりからテストがあるので更新遅れます。

1日一作が、3、4日で1作になると思います。

ほんとすいません。

第4話（前書き）

第4話投稿です。

やっぱり駄文です。

これからもよろしくお願いします。

第4話

IS学園保健室

- 首輪付き side -

さつき織斑先生（織斑さんとか千冬先生と読んだら出席簿で殴られまくった）が来て、

「今日は特に何も無いが、ここからは出るなよ。」と言われたので名前を決めようと思う。

別にあの分厚い本を読みたくないとかそういう訳じゃナイヨ。

（名前どうしよう、ほんとに）

（そのまま首輪付きは、駄目だよなあ
リンクスも無理があるし。）

（頸くび 和月わつきとか！）

（いや………なんかいやだ）

（うっくん どうしよ？ほんとに）

（アスピナ・A・トラスとか「AはアクアビットのA」変態のところは名前にしたくないな。うん）

（ウルナ・クラニウムはどうだ！……たしかラテン語で意味が尺骨と頭蓋骨だった気が……やめよう）

(どーしよどーしよほんとにどーしよ。)

(うーんレイヴンはどうだっ！・・・そこそこいいな候補に入れよう。)

(どうしよ。うーん)

ガラッ

「誰ですかあ？」

「私だ。」

「織斑先生ですか。どうしたんです。ここに何か用でも？」

「いや、とくにはないが。」

「そーですか。んで今、名前決めてるんですけど候補聞きます？」

「聞かせてもらう。どーいうのが出たんだ？」

「まず、そのままで首輪付き」

「却下だ。」

「何ですか。どこがダメなんですか！」

「全部だ。まず名前ですらないじゃないか。」

「まあ、そうですね。」

「で次はなんだ。」

「あれ？気になるんですか？」

「最初からそれだとしてもないのばかりな気がしてな。」

「さすがにそれはないですよ。」

自分の名前くらいちゃんと考えますよ。

……たぶん………」

「はあ、で次はなんだ。」

「次は・・・頸 和月で「駄目だ。」これもだめですか？」

「当たり前だ。 さっきと同じじゃないか。」

「少し違いますよ。 今回は、苗字が、頸 名前が、和月ですよ。発音も違いますし。」

「それでもだ。」

「ううう 次はアスピナ・A・トールスです。」

「まあ それは何とかなるんじゃないか。」

「そしてAは、アクアビットで由来は俺のところの壊滅した企業で、ものすごい変態な企業です。」

トールスは、そのアクアビットの技術者を取り入れた企業です。こちらに変態な企業です。」

「それを言わなければ前よりはマシだったんだが、それを聞いて思ったよ、駄目だ。」

「まあこれはもとよりするつもりありませんでしたから。」

で次はウルナ・クラニウムはどうですか？」

「駄目だ。知っているぞ、その意味くらいは。」

「じゃ、じゃあラストで、レイヴンはどうですか。これはさすがにいいですね！」

「また名前じゃあないが、もうそれでいい。それで……………」

「分かりましたー。んじゃあこれから自分のことはレイヴンと名乗りますね。」

「ああ。」

「では改めまして、よろしくお願いします。織斑先生。」

「ああ、わかった。であればもう覚えたか、レイヴン。」

「あの分厚いのですか？」

「そうだ。」

「あ、あのまだ6割ほどしか。」

「今日中に覚える。いいな。」

「了解いたしました、織斑先生！」

「じゃあ、それではな。」

「はい」

ガラッ

「うううううううう」

「これ今日中に覚えるとか無理だろう。」

「……………はあ、まっがんばりますか！」パラパラ

レイヴンは時折、現実逃避をしたり悶えたりしながら分厚い本を読んでいた。

(.....きつ.....ゴール.....つても.....いよいぬ.....)

第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

これからも頑張らせてもらうのでよろしくお願いします。
次回は、たぶん紹介に入ります。

主人公紹介＋機体説明（前書き）

投稿です。

次からたぶん原作です。

別にこれは読まなくてもいいです。

ほとんど適当に書いたことなので。

あと駄文です。

これから駄文のままだと思いますが、よろしく願います。

主人公紹介＋機体説明

名前 首輪付き レイヴン

年齢 18歳

趣味 読書

好き ストレイド 寝ること

嫌い アスピナ、トーラス、アクアビットの技術者達
夢に出てきたソルディオス・アンサラ

ACFaの企業連ルートのビッグ・ボックス戦でメルツェルと相打ちになって死亡という設定になっています。

ちなみにウィン・D・ファンションがヴァオーに瞬殺されたのは、ヴァオーのガトリングとバズーカがうまくこと当たったからです。首輪付きのカラードランクはNo.6ということになっていましたが、強さ的にはものすごい頑張ってぎりぎりNo.2のウィン・D・ファンション勝てるか勝てないか、というくらいです。

機体説明

IS ストレイド

中にACFaの装備が全部入っているというキチガイ仕様で

す。

コジマはもちろん無害です。

シールドエネルギーはAPをものすごく少なくした感じで、普通のエネルギーはコジマの力で回復していきます。

ビッグ・ボックス戦+今の機体アセン

R ARMUNIT : MR - R102

L ARMUNIT : 03 - MOTOR KOBRA

R BACKUNIT : DEARBORN 02

L BACKUNIT : KAMAL

SHOULDERUNIT : NODATA

R HANGERUNIT : NODATA

L HANGERUNIT : NODATA

HEAD : H11 - LATONA

CORE : SOLUH - CORE

ARMS : AM - LAHIRE

LEGS

: 03 - AALIYAH / L

FCS

: FS - HOGIRE

GENERATOR

: GN - JUDITH

MAINBOOSTER

: CB - RACHEL

BACKBOOSTER

: BB11 - LATONA

SIDEBOOSTER

: AB - HOROFERNES

OVEREDBOOSTER

: I - RIGEL / AO

STABILIZER

HEADTOP

: HD - LANCHELL - OP

T
01

HEAD
RSIDE

: GAN01 - SS - HSSO

ARMS
R

: GAN01 - SS - ASSO

ARMS
L

: GAN01 - SS - ASSO

LEGS
RMIDDLE

: GAN01 - SS - LMSO

というアセンになっています。

あとこのアセンは弱いと思います。理由は、ほとんど適当に作ったからです。

色はメインを真っ黒にしてところどころにくすんだ赤をつけるだけです。

次はパッケージについてです。パッケージは、A Fにします。

一応すこし説明します。

まずギガベースです。これはたぶん本編に出します。

大きさもあまり大きすぎず長距離砲撃もできて、水陸両用だからです。

次にランドクラブ、これはたぶん出しません。

理由は特徴が多いくらいです。長距離砲撃もギガベースみたいなのがA C F aにもありませんでしたし。

でもソルディオス・オービットは出します。

あの変態企業が作ったあれは出したいです。

次はステイグロです。こいつは100パーセント出しません。

なぜならISへの攻撃方法がミサイルのみになるからです。

大型レーザーブレードは、絶対当たりませんし、海上での高機動も相手がずっと浮遊していますので意味ありませんし、まず海上戦は今のところ福音戦しかないからです。

グレートウォールは、出したいけれどあの列車みたいのを走らせる場所がないと思うので出さないと思います。でも場所を思いついたら出すつもりです。

個人的にあの大量ミサイルとガトリンググレネード砲は好きなので。

イクリプスは出したいです。飛んでいるし武装がハイレーザーとミサイルで使えそうなので。

でも一夏特訓のときくらいにしか出しません。あの便座もどきは、すごい脆いので。

カブラカンも出したいです。気に入ってるんであのかっこいい形。ミサイルを壊したら何もできないと思わせといてのあの自律兵器の大群。すごいカッコよくないですか？

ジェットは、出さないと思います。出す場面が思いつかないので。

スピリット・オブ・マザーウィルは出したいけど、あのでかいを出すほど広い場所ってありましたか？

アンサラ は出します。一応ACF aのラスボス的存在なんで、（とっつきで1発だったけど）

ミサイルもたくさんあってレーザーや近づいてきたときのアサルトアーマーなど脆いけど武装は、ちゃんとしているので。

これで今のところの説明はたぶん終わりです。これからも増えていくと思います。

主人公紹介＋機体説明（後書き）

最後まで読んでもらってありがとうございます。
これからよろしく願います。

第5話（前書き）

今回から、原作入ります。

これからも駄文になると思いますが、よろしく願います。

第5話

IS学園一年一組教室

- レイヴン side -

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはショートホームルームじめますよー」

「それでは皆さん、一年間よろしくおねがいしますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（うわーなにあれ無言かよ、かわいそすぎるだろ。まあ俺もただど。）

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

（しかも前の男子、織斑一夏だっけ？あれひでえだろ。最前列のど真ん中なんて、周りの注目集めすぎてるし、そして俺は、一番後ろの窓際だ。近くのしか見てこないから楽だぜ。織斑一夏君、ご愁傷様そして俺は、徹夜である本覚えたから眠いんだぜ！というわけで寝るzzzzzzzz）

- 一夏 side -

(これは……想像以上にきつい……)

なぜなら俺ともう一人以外全員女子だからだ。
もう一人は、たぶん後ろの方だと思うが、

(なんで俺は、真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否
が応でも注目を浴びるじゃないか
いいなあもう一人の方は、後ろで………)

はあと小さくため息をつき、ちらりと窓際の方に目をやる。

「……………」

助けを求めて見たら薄情なことに窓の方へふいつと顔をそらした。

(なんてやつだ。もしかしたら嫌われているのか?)

「……………くん。織斑一夏くんっ」

(ほんとに嫌われているのかなあ。嫌われるようなことをした記憶
はなかったはず。

6年ぶりに再会したのに……………)

「おーり！むーらー！くんっ！織斑一夏くんっ！」

「はっはいつ！？」

声が裏返ってしまった。案の定笑い声が聞こえてきた。恥ずかしい。ともかくクラスは、俺ともう一人の2人。他の生徒二十九名。副担任も女性。担任は女性らしい、まだ来ていないからだそうだ。なにしてんだろうね。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに、謝らなくても………っていつか自己紹介しますか、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

そして俺は、しっかりと立って、後ろを振り向く。

（うつ　きついつ　　しかももう一人の男子？は寝てるし。）

一気に視線が集まり、全員（・1）がこっちを見てくる、あの見捨ててきた薄情な筈でさえ、横目で見てくる。

「えー……………えっと織斑一夏です。よろしく願いします。」

儀礼的に頭を下げ、頭を上げる　　ってなんだよ。その『もつ』という喋ってよ』的な視線は。

そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気はなんなんだ。

（喋ることなんてそんなにないんだぞ。そして）

「……………」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。

（どうすればいい、そして何を言えばいい）

「……………」

（いかん、マズイ。ここで黙っていたままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう。）

俺は呼吸を一度やめ、そして再度吸い、思い切って口にした。

「以上です。」

がたたっ

・レイヴン side ・

がたたつ

(ん…………なんだ？

まあいいや。 z z z z z z)

「あ、あのー」

パンツ！

「いつ

！？」

「げえつ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち一年生を進級するまでに使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことにははいかYESで答える。逆らってもいいが、言うことは聞け。」

「キヤ ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

（ぬああああ 寝れないよう……………zzzzzz）

「・・・毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きやあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして！」

（ビクッ……………zzzzzzzz）

「で。挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パンツ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「で……」

カツカツカツ

（ん？　なんか近づいてくる。　まあいいやZZZZZZ）

ガスンツ！

「おい起きろ。いつまで寝ている」

「いゝだあっ！？　何！？何が起きたの！？　頭痛い！？」キ
ヨロキヨロ

なぜかみんながこつちを見てくる。

「何が起きたの」

「おい、自己紹介しろ。」

「えっ 無視？ まぁいいけど」

レイヴンは立ち、

「どうもーはじめまして。 レイヴンといいます。 名前については気にしないでくださーい。

趣味は、読書で、好きなことは寝ることですー。

ISについては初心者なのでこれからよろしくおねがいします。」

「語尾を伸ばすな」

ガスン

「痛い……………」ガスン

キンコーンカーンコーン

「さあ、S H Rは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。」

その後は実修だが、基本動作は、半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ、私の言葉には返事をしろ」

(うあ 暴君じゃん。すげえなあ。もう無理眠い……………)

「席に着け、馬鹿者。そこは寝ようとするな。」

（ええっ なぜばれたし。）

そしてSHRは、終わった。

$$\begin{pmatrix} Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \end{pmatrix}$$

第5話（後書き）

ほんとにすいません。

駄文にもものすごいなっ と思います。

いろいろごめんなさい。

今週から、だんだん更新速度が遅くなっていくと思います。
すいません。

第6話（前書き）

すいません少し遅れてしまいました。
勉強などがあつて、時間がありませんでした。
あとまた駄文です。よろしく願います。

第6話

IS学園教室

- レイヴン side -

一時間目のIS基礎理論授業（さすがに授業のときは起きた）が終わって今は休み時間。

（あゝきついよう　なんか視線がすごい。　ってか他のクラスの人とかめっちゃ来てるし。）

そして雰囲気すごい『あなた話しかけなさいよ』とか『ちよつとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』　的な感じですごい混沌^{オス}になっていると織斑一夏がこっちに来て

「初めまして。　織斑一夏です。」

「ああ　俺はレイヴンだ。　男は俺らだけなんだ別に敬語じゃなくてもいいよ。」

「わかった。　俺のことは、一夏って呼んでくれ」

「ん 俺のことは好きに読んでもらって構わない。」

「じゃあ、これからレイヴンって呼ばせてもらつよ。」

「んじゃあこれからよろしく頼む、一夏」

「こちらこそよろしく頼む」

「……………ちよつといいか」

「ん？ なんだ？」……………「………」

「一夏に用か？」

「はい、ちよつと一夏に。」

「別に行つてきてもいいぞ。一夏、俺のことは気にしないでいいから行ってこい。」

あと篠ノ之さん敬語じゃなくてもいいから。」

「わかった、行くぞー夏」

「お、おう」

（よし！寝るか！ 視線がすごいし、もう耐えられない・・・
zzzzzzzzzz）

ISについての授業中

「????????であるからして、ISの基本的な運用は現時
点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合
は、刑法によつて罰せられ????????」

山田先生が、教科書を読んでいる。

一応、レイヴンは、徹夜で参考書は読んでなんとなく覚えているか
ら大丈夫だが

（一夏、何キヨロキヨロしたり、頭抱えてんだよ。）

（あ、山田先生に分からないことがあつたら訊いてねって言われて

る。）

「先生!!」

「はい、織斑くん!!」

「ほとんど全部わかりません!!」

（うおっ　　すげえ、一夏まじすげえよ）

「え…………ぜ、全部、ですか……………?」

（山田先生がすごい困っているよ。どうする一夏）

「え、えつと織斑以外で、今の段階わからないって人はどれくらいいますか?」

俺は手を挙げない。

一夏が絶望したような目で見てくる。ものすごい見てくる。

「レイヴンくんは、大丈夫ですか？」

一夏がまだ見てくる。

「はい、一通り読んみましたから。（ドヤッ」

さらに一夏が絶望したようだ。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の隅で控えていた織斑先生が訊いてくる。

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

（すげえまじすげえよ一夏）

パアンッ！

「必読と書いてあったらろつが馬鹿者」

「レイヴン、こいつに参考書を貸してやれ」

「はい、そのつもりです。」

「織斑、一週間で覚えろ、いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……………」

「やれと言っている」ギロツ

(こわっなにあれこわっ)

「……………はい。やります」

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙か凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。」

理解できなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。

「

一夏が一瞬いやそんな顔をした。

(おっ 望んできたわけじゃない的な顔しとるし。 まあ、わかる

けど。」

「……………貴様、『自分は望んでここにいるわけじゃない』なんて思っているな？」

一夏が驚いた表情をする。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。」

それすら放棄するなら、まず人であること辞めることだな」

（せんせー もうここにほとんど人じゃないのがいるけどどうすればいいですかー？）

「……………」

このあと特に何もなく授業が再開した、強いて言うなら山田先生がこけたくらいであった。

ちなみにレイヴンは考え事の最中、ものすごい頑張ってポーカーフエイスをしていたため織斑先生には気づけなかった。

第6話（後書き）

読んでいただいております。

ついでに言うなら、

自分は中3です。受験やらなんやらの面倒事が多くなってきました。なので更新速度がだんだん遅くなったりすると思います。

ほんとにすみません。

これからもよろしく願います。

第7話（前書き）

7話投稿です。
駄文です。

第7話

IS学園教室

- レイヴン side -

「ちょっと、よろしくて?」

二時間目の休み時間、俺が一夏と話しているといきなり声をかけられた。

「へ?」 「なんだ」

話しかけてきたのは金髪ドリルだった。

「まあ! なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

(なんだ、こいつうるさいな)

「すまん。お前のことなんてなんも知らん。」

「夏が軽くイラついてるし、

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

「がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっとこけた。」

「あ、あ、あ……………」

「『あ』？」「」

「あなたつ、本気でおっしゃいますの！？」

「はあ説明してやるか。」

「国の代表の候補の人だ。読めばわかるだろう。」

「そういわれればそうだ。」

「そう！エリートなのですね。」

あつ、復活した。復活はやいなあさすが代表候補生（笑）

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのです。その現実をもう少しりかいしていただける？」

「そっか、それはラッキーだ」

「まあいい、消える 興味もない。」

「…………馬鹿にしていますの？」

「はい、そのつもりです。」

「大体、あなたたちISについて何も知らないくせに、よくこの学

園に入れましたわね。男でISを使えると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されてもこまるんだが」

「そーだそーだ。」

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しく教えてあげますわ」

これが優しさというもののか、初めて知ったよ。

「ISのことわからないことがあれば、まあ、泣いて頼まれたら考えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試つて、あれか？ ISを動かして戦うつてやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ。」

「あれ？ 俺も俺も倒したぞ教官。」

「は……………」

「あ、一夏お前も倒したんだ。」

「レイヴンもか？」

まだ名前が首輪付きの時のこと思い出す。

なんか織斑先生が来て、入試をしてもらったこと言ってきた、誰だか分らなかったけど、戦った。

ちなみにアセンは、グレイツィアでガトリングとバズーカを連射しまくった。

「マツハでハチの巣にしてやったぜ。」

「わ、わたくしただと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「そーなんじゃね？　なんかありえそうだし。」

ビシッ。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……………」

「いや、知らないけど」

「俺らはとりあはず倒したぞ。」

「あなた達！あなた達も教官を倒したって言うの！」

「うん、まあ。 たぶん」

「さっきから言ってるじゃん倒したって。」

「たぶん！？ たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。 な？」

「こ、これが落ちていていられ??????」

キンコーンカーンコーン。

「っ……………！またあとできますわ！逃げないことね！よくって！」

「あとで来なくてもいいぞー。 むしろ来るなよー。 よくないからなー。」

1、2時間目と違って山田先生ではなく、織斑先生が教壇に立っている。

何か大事なこともあるのか山田先生まで、ノートを持っている。

「それではこの時間には実践で使用する各種装備の特性について説明するが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておく。」

「クラス代表とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。」

ちなみにクラス代表戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はいっ。 織斑くんを推薦します!」

(一夏、面倒事押し付けられてるし)

「私は、レイヴンさんを推薦します!」

(はっ? 俺?)

「候補者は織斑一夏とレイヴンか………他にはいないか? 自薦他薦は問わないぞ」

「「お、俺!?!」」

「俺はそんなのやるつもりないぞ!」

「俺もだ!」

織斑先生に睨まれた。

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。」

「い、いやでも??????」

「待ってください! 納得がいきませんわ!」

まだ反論を続けようした一夏を、突然甲高い声が遮った。
セシリアが文句を言い続ける。

「そのような選出は認めません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくし、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（よし！金髪ドリル！そのまま仕事引き受ける！俺から注意を逸らすんだ！）コソコソ

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ 私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

（あと少しだ！金髪ドリル！もう少しで俺は楽になれる！）コソコソ

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で??????」

カチン

（ん？ どうしたんだろう？一夏）コソコソ

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

（一夏アアアアアア！何やってんだよ！）コソコソ

「なっ……………！？」

（やつちゃったよ、一夏君。きみはもう少して仕事無くなったのに。俺はまだ大丈夫だがな！）コソコソ

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

（よしよしよしよしよしよしよし！）コソコソ

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

（よっしゃ！きいいいたああああ！

これで俺は大丈夫な筈、みんな一夏と金髪ドリルに意識が行ってるし！）

でレイヴンがこそこそしてる間にハンデやら、やめときなよとかの話は進み、

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで2回行う。」

「織斑先生。」

「なんだ？」

「何で2回なんですか？」

「後ろでこそこそしているやつを見る」

(コソコソコソコソコソコソ オレハジユウダー イエーイ) コソ
コソ

「「あっ」

(……………ん？ なんかおかしいぞ。) コソコソ

「レイヴン、お前も試合だ。」

「えっ！？ ま、待ってくださいよ！ みんな忘れてたじゃないですか！俺のこと！」

「お前も、推薦されていたからな。」

「なぜだアアア！」

「うるさい」

ガスンと出席簿が飛んで来て当たった。

「痛い。」ガスン

「そういうわけだ。織斑とオルコット、レイヴンは用意をしておくように。それでは授業を始める。」

（あと少しだったのに……………あと少しだったのに……………）

そのまま授業は進んでいった。

第7話（後書き）

次また遅くなるとおもいます。
すいません。

お知らせ（後書き）

本当にすみません。

第8話（前書き）

どうも久しぶりです。そしてすいませんでした。

もうなにかとすいません。遅くなってしまうって申し訳ありません。

一応、あした中3の期末テストなんです、いろいろめんどくなってしまうたので投稿しました。

勉強をしようと思ったんですけど、めんどくなってしまうって結局ほとんどやりませんでした。

もう、『え？…テスト？なにそれ？食べんの？』っていうくらいです。

あと今回、すこしだけ書き方変えてみました。駄文ですがよろしく願います。

ほんとにもうすいませんでした。

第8話

IS学園教室

放課後、俺はたいしてすることもないのでとりあいずぼけーっとしている。

周りがきゃいきゃいと小声で地味にうるさいので寝るに寝れないが、寝ようと努力していると

山田先生が来た。

「ああ、織斑さんとレイヴンくん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

一夏とは少し離れていたもので、疑問に思いつつ、近づいておく。

「はい？」 「どうしたんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

「俺の部屋、決まっていなかったんですか？前に聞いた話だ

と、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺は保健室から毎日行くと思ってたんですけど。」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したみたいです。」

で、織斑君は1025室の二人部屋ですね、レイヴン君は1012室で一人部屋です。」

「山田先生、荷物は一回家に帰らないと準備できないですすし、今日はもう帰っていいですか？」

俺はもとより荷物無いしなあ。どうしよ？

「あ、いえ、荷物なら?????」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

おお、織斑先生いつの間に。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「少なくとも、なんかいろいろと。あとめっちゃ大雑把だし。」

「織斑先生、俺もう部屋に行っていていいですか？眠くて眠くてもう寝たいんですよ。」

「実はもうギリギリなのだよ。眠くてやべえぜ。」

「まだ話がある。もう少し待ってろ。」

「はい、わかりました」

眠い眠いやばいやばい眠いやばい

「時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂で取ってください。」

「ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけれど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えませんか」

「え、なんですか？」

「一夏、それ本気で言ってるのか？この状況で」

「へ？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

やっと理解したか一夏。っていうかこの状況でわからないのもある意味すげえな。

「おつ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」

「い、いや入りたくないです」

そりゃー普通にダメだろ。ここで　はいっ、ものすごい入りたいですって言える人っているのか？

「ええっ？　女の子に興味がないんですか！？　そ、それはそれで問

題なような……」

山田先生、ちゃんと意味わかってるのかなあ。

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれ……でいいわね」

「中学生時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって」

サササッ

やばい！あれには近づいたらだめだ！なんかいけない気がする！

「お、おい！レイヴン何で離れてってるんだよ」

「いや、なんでもない。大丈夫。ほんとだから。たとえ友人が同性愛でも気にしないから、

でもゴメンね。俺さすがに男に恋愛感情抱けないからさ。今までどうりだったらいいけど。

レイヴンとか無理なんだ。すこしトラウマだから。」

「ちげえよ！同性愛じゃねえよ！あとレイヴンってなんだよ！」

パアン！

「織斑、静かにしろ。」

「……………すいませんでした。織斑先生」

トラウマっていうのは前、夢の中でなんか古王？っていう人が『付き合わないか？』って言って迫って来たり、あのジェラルドさんと戦って途中で『大胆に過ぎたな、体に聞く事もある』とか言って迫られたりしてまじで怖かったんだ、でそれ以降、同性愛とかゲイヴンとかマジで無理になったんだ……………。

「え、えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。

織斑ちゃんとレイヴンくん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

むりじゃね。道草くっちゃダメっていうけど五十メートルくらいしかないよね。
行くところなんてないよね？

「ふ……………」

一夏がため息ついとるし、周りもまだいろいろ騒がしいし

「はあ、一夏寮行くか？」

「そうだな。早くこの視線から解放されたいし。」

「じゃ、いこうか。」

ああ、視線がきつかったが、
????これでやっと…………部屋でゆっくり、できる。
> i 3 5 9 3 5 — 4 3 9 0 <
こんな感じの表情になつてる。？

今は寮の廊下で部屋を目指している。

「えーと、ここが1025室だな。レイヴン、俺部屋ここっばいか
らまたな」

「ん、またな。」

ガチャ

んーと俺の部屋はたしか1012室だから、もうちょっと先かあー

ふあゝあ あゝ眠みい。早く寝てえなあ。
一人部屋あゝゆつくりできるゝ……………

「?????……うお???おお??? ……」

ん?なんか叫び声が聞こえる……………まつ、いつか。
ん?おつ、あつたあつた1012室だな。

ガチャ

おおゝ広いなあゝ ベッドもふもふしてるゝ
いいなあいいなあずつとここいたいなあ。
ベッドもふもふもふ

「……………??? うお??? たす???……………!」

ん?

「……………??? おおお????けてレ……………!」

なんだ?

「……？うおおおおたすけ？？？ブン………！」

なんだ？なんだ？なんか近づいとるぞ？

「……うおおおおお！！たすけてッ！レイヴンッ！！」

ハ？

ガチャガチャガチャガチャ

「助けてレイヴン！ドア開けてくれ！早くっ！」

「なんでだよ。」

ガチャガチャガチャガチャ

「早く早くほんとお願いします！助けてください！開けてください
！」

「はああ、しょうがねえなあ。」

何があつたんだろ？

ガチャ

「ありがとう！レイヴン！恩に着る！」

「んで、何があつたんだ？そんなに慌てて。」

「いや、部屋に行ったら幼馴染がいても?????」

コンコン

「すみません。レイヴンさん、一夏来てませんか？」

ん？また別のが来たぞ？

「げっ、第！」

「ちょっと待ってろ」

ガチャ

「どうしたんだ？篠ノ之さん？あと敬語じゃなくてもいいのに。」

「すみません。一夏ここにいませんか？」

「いるけど？なんで？」

「ちょっと部屋のことです」

「ふうん　おーい一夏あー篠ノ之さん来とるぞー」

「うっ」

「出てこないと無理やり連れだすぞー」

「わ、わかったから！行くから！」

「おk、わかった。篠ノ之さん、一夏来るって。」

「わかりました、ありがとうございます。」

「んー敬語じゃなくてもいいのに。まっいーや。」

「うう」

「行って来いー夏、篠ノ之さんもー夏もまた明日な。」

「はい、また明日。」

「また明日な、レイヴン」

「また明日な」

ガチャ

おおーねむいねむい早く寝たい

ボタン

も……う……無……理……
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z

第8話（後書き）

最後まで読んでもらってありがとうございます。

ほんとに駄文でしたけどありがとうございます。

テストってめんどいですね。勉強やりたくないです。

次からも駄文になると思いますですがこれからもよろしくお願いします。

ああ、AC5早く出ないかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4031y/>

首輪付きが学園入り

2011年11月27日21時46分発行